

「ウサギの室内飼育」を通して、こころ・命を大切にする幼児の育成

星野美里 松井ゆき子

1 はじめに

本園では、平成15年度からウサギの室内飼育を取り入れている。導入する前に、クラスに動物アレルギーの幼児がいないか等調査したり、どのような意図を持って飼育するのかを家庭に知らせたりし理解を得た。

飼育を始めてからは、幼児にとってどのようなプラス面があるかなど、具体的に実際の場面での様子を知らせていった。

今年度は、各家庭を対象にアンケート調査をし保護者の考えや不安な面・心配な面・期待する事等を把握した上で幼稚園側の意図を伝えた。

衛生面を心配する保護者が若干いたが、ケージの中を清潔にしておくことや給食の時には廊下に出しておくこと・触る前と後には手洗いをきちんとする事等を知らせている。

朝はテラスで、先生と一緒に園児を迎えるウサギに、子どもたちが喜んで接する姿を見たり、幼児の成長した様子を感じたりすることで、保護者の気持ちも変化してきている。



テラスで迎えてくれたウサギに“いっしょにあそぼ”

2 テーマに関する基本的な考え方

本園の特色を生かし、ウサギの世話をしウサギとともに生活することで、思いやりの心や生き物を大切にする気持ちが育つものと考え、ウサギと触れ合う中で、自分と同じ命を持っていることに気づき、そのことを通して生き物の変化や成長に関心を持ち、生きて

いることの大切さを知る経験は、幼児期に大切であると考え、



3 4本の柱

幼児のよりよい成長のための援助・支援をしていくために4本の柱を立てた。

- ・ウサギを身近に感じ、触れ合うことができるような、発達段階に応じた環境の構成・再構成の工夫をしていく。
- ・家庭や地域・獣医師などの理解や協力を得ながらすすめていく。
- ・ウサギの飼育から、さらには他の動植物まで関心を広げ、まわりのもの全てに心を通わせ、大切にしようとする心を育んでいく。
- ・ウサギと触れあい、観察し世話をすることで成長の様子や変化に関心を持ち、生きていることの大切さや自分と同じいのちを持っていることに気付けるような言葉かけや援助に心がける。

◎教師がウサギの気持ちをウサギになりきって代弁していくことで、幼児はより具体的に理解できるので“教師がいかにウサギになりされるか”が環境の構成と援助のポイントになってくる。

※環境とは…幼児をとりまく、物・人・時間・空間・雰囲気を含めるまわりのものすべてと考える。

実践事例1

『先生伺ってもよろしいでしょうか』

生き物を飼育していく上で、わからないことや心配なこと・具合が悪くなったときなど、専門家の判断や協力は重要である。本園

には、信頼できる獣医師がウサギの室内飼育をバックアップしてくれている。何度も助けられアドバイスを受けながらウサギの世話をしている。



園庭から続く雑木林では、ノウサギの糞を発見することも…

3月

・15年度から室内飼育していたウサギのタッチのケージのすのこが血で汚れていた。慌てて教師がウサギの身体を見たが特に傷跡は見当たらず、いつもと同じ様子。



・すぐに動物病院と連絡をとる。当日の様子、えさの食べ具合、量など細かく話す。夕方であったため、明日診察していただくことにする。



・診察の結果、爪が折れて出血したことがわかる。その口は猫が園のまわりをうろうろしていたので、慌ててどこかに爪を引っ掛けてしまったようである。



・獣医さんに爪を切っていただき、爪の切り方や薬の飲ませ方等の指導も受ける。



・全職員に伝え共通理解する。爪切りの様子や薬を飲ませる場面を幼児に見せる。幼児は、「僕の時はお母さんがしてくれるよ。いい子にしているね。」などといいながら見ている。

5月

・幼児の手の中で、ウサギのどんちゃんがぐったりして動かなくなる。かすかな心臓の鼓動を感じるのみである。



・すぐ病院に連れて行ったが…もう口を開けることはなかった。



・動かなくなったどんちゃんをクラスに連れて行き、あらためてみんなで、扱い方や世話の仕方など話し合い確認しあう。

※詳しい状況は事例2で。



<考察>

- ・生き物を飼育していく中で、病気・死・体調の変化等に直面することは幾度となく繰り返されるであろう。教師には判断できないことが度々あるのが現状である。その場合、専門家である獣医師の協力を得られることで、教師自身の知識も広がりその後の保育につなげていけると考える。
- ・普段から幼稚園側と獣医師の連携を大切に、理解・協力を得ていることで、職員は安心して室内飼育を行い、幼児に心・いのちの大切さを理解できるであろう。

実践事例2

『どんちゃんがお星様になりますように・・・』5歳児の例

クラスで飼育していたウサギのどんちゃん。幼児は自分たちのクラスの仲間として関

わり、世話をしていた。突然の死を目の当たりにし、それぞれの思いを抱えてお墓作りを
5月26日（金）

し、手を合わせごんちゃんを空へと見送った。

幼児の姿	幼児の心の動き	環境の構成と援助
・ごんちゃんの突然の死にとまどう幼児。 ・教師の話真剣な表情で聞く幼児。 ・一人の幼児が「ウサギの赤ちゃんまたもらってくればいいよ。」と話し出す。 ・幼児の中から、「ごんちゃんかわいそう」「忘れちゃったらかわいそう」という言葉が聞かれる。 ・花を持つ幼児・ごんちゃんを抱く幼児。ほかのウサギのお墓の隣に穴を掘る。 ・そっと土をかけ、「お星様になりますように」とお祈りをしている。	・「どうして?」「なぜ?」と信じられないのだろう。 ・どうして死んでしまったのか、考えようとしている。 ・いなくなったのなら、代わりを見つけようとしたのだろう。 ・ごんちゃんの事を考え、すぐに代わりを見つけることは、寂しいことだと感じたのだろう。 ・優しくかけてあげないとかわいそうであると感じたであろう。 ・様々な思いを抱きながら、ごんちゃんの死を受け入れようとしている。	・幼児の戸惑いの気持ちを受け入れなら、現実を詳しく教える。 ・幼児一人一人に命の大切さ・ウサギの扱い方など話す。 ・幼児に、「死んでしまったものは生き返らない」ことや「ごんちゃんは寂しがらないだろうか」などを話す。 ・幼児と話し合い、しばらくはクラスのウサギは飼わないことにする。 ・ごんちゃんを掘った穴に入れ、幼児一人一人が土をかけるよう伝え、見守る。 ・一人一人の気持ちを大切に作る時間を作る。 ・幼児とともに、ごんちゃんを空へと見送る。
<翌日> ・手紙を書いた幼児 ・花を摘んで供える幼児 ・野菜を供える幼児 ・「なにも持ってこなかったけれど、お墓参りしてこよう」という幼児 ・送ってきた母親をごんちゃんのお墓に連れていく幼児	・家に帰ってからごんちゃんのことを思い出していたのだろう。	・様々な幼児の姿が見られた。一日散にお墓に走っていく幼児の中には、様々な思いが入り混ざっているように見える。幼児の気持ちを受け止めながら、一緒にお墓参りをする。 ・家庭でも幼児の気持ちを大切にしたい関わりがあった。



ウサギのお墓に花をお供えする5歳児

<考察>

- ・実際に死に直面した幼児はショックが大きく、現実を受け止められなかった様子だった。

た。しかし、今回の事故をきっかけにして、幼児なりに命の大切さやウサギの扱い方等を考えることができた。

- ・家庭での遊びの中でコンピューターゲームが多くなってきている。そのせいか、「死」の捉え方に心配な部分がある。『死んだら生き返る。』幼児の中にはそのような考えが存在していると思われる。
- ・このことにも配慮しながら、『生と死』について幼児にわかりやすく伝えていくことが必要であると感じる。実際の飼育とバーチャルゲームは違うこと・リセットボタンはないことを理解してほしい。
- ・家庭での関わり方や保護者の考え等を知り、幼稚園と連携していくことも大切になってくることがわかった。

その後・・・

- ・クラスにウサギがいなくなったひまわり組は、何となく活気がなくなったように感じられたため、ウサギ小屋にいるママウサギのみみちゃんの世話をしてくれないかと提案する。
- ・当番を決め、小屋の掃除・排泄物の始末・給餌等するようになると、任されたという責任もできいきいきと活動し、家庭から野菜くずを持参したり登園途中タンポポやクローバーを摘んできたりする姿も戻った。



- ・8月末夏休みが終わる頃、桑原先生よりホーランドドロップ種の子ウサギをいただく。しばらく職員室で飼育する。夏休み後、子ウサギと対面した幼児は様々な思いを抱いていた。

※先生の部屋にいるうさちゃんをもらってこようよ。
 ※また死んじゃったら困るよ。
 ※みみちゃんのお世話をすればいいかな？
 ※でも・・・クラスにうさぎがいたらいいな。

- ・9月13日（火）年長児を対象に『動物ふれあい教室』を開く。

- ・獣医さんからウサギの生態や扱い方・気をつけなければならないこと等を教えていただき、実際に8月にいただいた子ウサギを抱いてみた。



↓
 『この子』をどんちゃん（ママウサギ）の代わりではなく、あたらしいクラスの仲間として世話をしてほしいことを、幼児に伝える。

↓
 「ひまわりちゃん」として、クラスの仲間に入り新しい生活が始まる。

※自分たちが得た知識を3歳児や隣接する保育所の2歳児に対して『ウサギふれあい教室』を開いた。



※12月、生活発表会で手作りの大型紙芝居の発表をし、保護者やお客さんからも大きな拍手をもらう。

【うさぎのおせわ】【たいせつないのち】

あらためて「いのち」について考える機会になり、大きな自信につながっていったことは間違いない。

<幼児の中に育まれてきたもの>

◎ウサギの気持ちを教師が代弁していったことで・・・

・ウサギが抱かれることを嫌がっている

ときには、「疲れているみたいだから後でだっこするね。」と、自分の思いばかりを通すのではなく、ウサギの気持ちを考えられるようになってきた。このことは・・・友達に対しても自分の意見ばかりを通さず、相手の気持ちも受け入れられる「おもしろい」のころが育ってきた。

◎ウサギのチェック表をつけ、健康に関心を持たせていくことで・・・

- ・毎日の当番活動（一週間交代）の中で、「今日のうんちが多いね。」「ごはん残したね。」などとウサギの体調の変化や様子を前日と比べられるようになった。このことは・・・責任感が育ってきた。また、ウサギに対する意識が高まり幼児なりにウサギについての知識が身に付いてきた。

◎発達段階に応じて配慮・援助していったことで・・・

- ・年長児は当番活動を行い世話をすることで、個々が責任を持ちウサギに対する意識が変わってきた。
- ・「ウサギふれあい教室」を行ったり紙芝居発表をしたりし、自分たちの持っている知識を伝えていったことで、関心が高まってきている言葉が友達との間でかわされるようになってきた。
- ・このことは・・・自分に自信をもてるようになってきた。また、小さな友達に対して優しくしようとする気持ちが育まれた。友達と協力する事の大切さを感じられるようになった。

<課題>

- 幼児の具体的な姿から育ってきたもの・育てたいこと等確認し、「こころ」「いのち」



を大切に育てる幼児が育ち、心を動かすことができるよう、安全面にも注意をしながら支援・援助していきたい。

○豊かな自然に恵まれた環境を生かしながら、今後も、園・家庭・地域と連携していく。

○動物の飼育をするのに、とても頼りになる獣医師の茂木先生が身近にいてくれるので、今後も連携して、動物飼育を進めていく。

(高山村立高山幼稚園教諭)

